

# 「仙台市農業施策基本方針検討委員会」における検討内容

## 開催概要

仙台市農業施策基本方針検討委員会は、令和2年度中に3回実施し、見直しにあたっての方向性の決定、基本方針素案の検討を行った。

- 第1回：令和2年9月7日（月）
- 第2回：令和3年1月15日（金）
- 第3回：令和3年3月18日（木）

## 委員

- ・東北大学大学院農学研究科教授 伊藤 房雄（委員長）
- ・仙台農業協同組合青年部顧問 遠藤 耕太
- ・仙台市農業委員 郷古 雅春
- ・せんだい食農交流ネットワーク代表理事 斉藤 緑里
- ・一般社団法人IKIZEN専務理事 齋藤 由布子
- ・仙台農業協同組合実行組合長会連絡協議会会長 佐々木 浩志

## 第1回での主な意見等

### 農業施策の基本的な方針の見直しについて

- 基盤整備を実施した東部地域と西部地域は同一視しない方がよいと考える。
- 市の総合計画の検討において農業のPRが足りないという意見が出ていた。
- 農業は、販売において競争する面と生産において気象や鳥獣害と戦う面がある。
- 仙台市は人口100万人の需要を抱えていること、都市部と中山間地の両方の農業形態を抱えていることが特徴と思われる。
- 目指すべき将来像に、実際に生産・販売を行う農家、特に若者のモチベーションを高めるような計画としてほしい。

### 「農業施策の方向性（H28-32）」の振り返りについて

- 補助を行っても実際に利益が出なければ意味がない。加工業者の誘致も必要なのではないか。
- 給食用の環境保全米は、指定された高価な資材等を使用するため生産者のリスクがあり、得がない状態。
- 農地の集積を進めつつも、小規模農業者を残し、集落から離れないような戦略を進めていくことが必要ではないか。
- ほ場整備を実施できず、大型機械で耕作できないため受け手が見つからない中山間地域の農地は農業者の高齢化が進み、後継者もおらず維持管理ができない。

### その他

- ブランド化は、コンセプトとターゲットの専門家による設計が重要である。地域資源の磨き方や魅せ方で新たな客層が生まれる。
- 面積当たりの収益性向上のため、果樹への転作や大豆・枝豆を重点品目にするには有益と考える。
- 農業者が継続して情報交換できるようなコミュニティの形成が望まれる。
- 新しい生活様式や物流の変化、JAや卸売市場離れの解決策の検討を。
- アクセスと物流に恵まれているにも関わらず地産地消の動きが生まれにくい。

## 第2回での主な意見等

### (1) 経営体の確保・育成について

- 人手不足の解消＝機械化やAI、ICTではなく、定年帰農者や若い経営者や栽培技術者といった人材の育成をしていく必要がある。
- 意欲ある若い農業者を差別化することにより市の農業の繁栄化につながる。
- 農業を維持するためには、兼業農家など多様な担い手をきちんと育成するというメッセージを強く打ち出しても良いのではないか。
- 後継者の問題などの課題を地域で共有して議論する機会をつくり、参加を促す仕掛けがあるとよいのではないか。

### (2) 生産基盤の強化について

- 未整理地区は、転作のブロックローテーションに含めていないため、転作の拡大のためにも基盤整備の必要がある。
- 小規模の水利組合では予算や労働力の面で水路の管理が難しいため、集積して大規模に管理していけるとよい。
- 農地や農業用施設は地域での管理が基本である。

### (3) 魅力ある地域の形成について

- 農地の維持は「縁」によらないマネジメントと啓発が大事である。
- 鳥獣被害による農産物のロスを防ぐことと、単価の高い果樹や野菜へ切り替え利益率を向上させることで新規参入が増えるのではないか。
- 有害鳥獣の侵入防止だけではなく、捕獲による個体数減が必要だが、焼却処分が捕獲に追いついていない。

### (4) 収益性の向上と所得の確保について

- 仙台産野菜のPRやブランド力が足りない。モデルケースの打出しや消費者への訴えかけを強化していく必要がある。
- 農業者個人での6次産業化は難しいが異業種との連携であれば実際の事例も多くあり、差別化等がうまくいくと価値を生み出す。
- ブランド化を進めるためには野菜の食べ方、調理の仕方というところまで含めてプロジェクト化するとよいのではないか。
- 非主食用米の作付は年1回の作付のため、リスク大。販売先を確保したうえでの生産誘導が必要である。

## 第3回での主な意見等

### (1) 経営体の確保・育成について

- 震災後設立の集落営農組織等は組織の方向性について迷走し始めている。行政等で組織の方向性を決める支援等をしていかないと空中分解にする可能性もある。
- 支援制度の対象が集落営農組織にこだわっているように感じられる。柔軟なやり方があってもよい。
- 一件ごとの課題を御用聞き型の方法で抽出して、それに合わせたメニューで対応していくことは必要である。
- 「次世代アグリヒロイン活躍支援事業」に期待している。現場で活躍している女性等にもっと表に出てもらうようなところにフォーカスされていて良い。

### (2) 生産基盤の強化について

- 生産基盤のリスク管理に注力するとのことだが、ため池の監視だけでよいのか。
- ため池自体の管理をどうするのかといった議論も重要である。

### (3) 魅力ある地域の形成について

- 非農家の方も一緒に草刈や泥払等をやってもらうということは難しいというのが実感である。
- 水路などにも農業以外の供給目的やインセンティブを与えると市民が参入してくれる。
- 一般の方にとって魅力だと思う取組や場所といった目線が大切。
- 長期的な土地利用の在り方として、「農業のために使いましょう」という考えにあまりこだわらず農地利用の仕方を見直すべきとも思う。
- 市民にどうやって農地の大切さや多面的機能を理解してもらうか継続的な発信が必要だと感じた。

### (4) 収益性の向上と所得の確保について

- 情報の取扱いにあたって、基礎であるパソコンやICTのリテラシーなども進めていかなければならない。
- DXやAIを導入するときはコストを考慮して導入を考えなければならない。
- 専門家派遣を依頼する費用や展示会等出展に係る経費など、販促ツールにおける金銭的なサポートがほしい。
- 地産地消できる環境がある。「みやぎまるごとフェスティバル」の仙台市版があってもよいのではないか。

### 「推進体制」について

- 計画期間中のある程度のタイミングで本方針の振り返りと今後の検討をするのが望ましい。